

本当はヤバイ旧約聖書
どう見ても邪神です

鷹一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリックスチャーン
キリスト教信者でもない限り、(俺含む)日本人はあんまり読んだことない聖書。絵画や映画で出てくる、カッコいいシーンしか知らなかった。

物語として普通に読むとヤバイ神である。どう見ても邪神である。

神「オマエラあそこ行つて全員虐殺してこい」(コレはひどい。ラノベ脳で読んでると、カナンの先住民が、盗賊に襲われるエルフ村にしか見えない)

特にやばそうなところをダイジェストにしてみた。

以前ネットで、「悪魔はこれだけしか人殺してないけど、神はこんなに殺してる」みたいな棒グラフをみたことあるけど、こんな内訳だったわけだ。

(挿絵予定)

物理本の厚さに引いてたが、ネット小説で鍛えられた今なら、ネットの電子版なら読めそう。

目次

第一部（創世記）	1
第二部（出エジプト記）	7

第一部（創世記）

はじめに神は天と地を創造された。

（そうだったん？ 「光あれ」が最初かと思ってたわ）

そして始まる6日間の大地の調整。テラフォーミング初日に「光あれ」で昼と夜、一日の時間単位ができるまで、それ以前の天と地の創造期間は定かでない。

多分4日目が一番大変。昼と夜、季節や年がわかる時計しるしのため、太陽と月、ついでに星を造られた。7日目はお休みです。

（時計かよ！）

神「俺様、星の名前全部言えるんだぜ。スゲーだろ」

（星が出てくるのはそれだけかよ！ 星の立場低いな！）

「んー動物の世話めんどくせーな。ヒューム人間でも作るか。コネコネ。地面の土から作ったから、名前は『地面アダム』な。もういつこ作って、こつちは『命エバ』な」

地面アダム「ハイ」

命エバ「ハイ」

「オマエらヒューム人間は動物の名前でも考えてろ」

「そのへんの果物食っていいぞ。ただし冷蔵庫真ん中のプリン木は食うなよ」

(中略)

「テメー、オレは冷蔵庫善悪のプリン実(*1)だけは食うなつたよな！ 聞いてなかったのか！」

アダム「つ、妻五六が食べていいって…」

エバ「へ、へび(*2)が食べていいって…」

神「まずへび、オマエは手足なくしてによるよろしとけや。あとヒューム人と敵対して踏まれてしまえ」

神「女五六、まず子を産むの大変にしとくから。あとオマエに判断させるとろくなことしねーな。男アダムの言うことだけ聞いとときやいいんだよ。それが罰だ」

(コレが、西洋において男性が女性を支配する根拠に長いことなつてたようだ)
アダム「あの、オレは？」

神「オマエには罰はない。ただ地面を呪つて、ついでにトゲトゲ植物アサ生やしといたから、こつから出たら苦労するかもな」

(地面と動物はとんだとばつちりである。すごい聾履(ひいき)を見た)

「とにかく、さっさと出てけ！」

：

「ふー永遠の命の実こつちフアイアーウオーちは食われなかつたみたいだな。念のため炎の壁フアイアーウオーで囲つとこ」

（挿絵予定）

「楽園追放」 マサツチオ

修復前 修復後

後年になって付け加えられた葉を除去して、原画に戻した

（中略）

「あー、ヒューム真の子の奴ら、俺の言うこと聞かねーし、自分真の子はヒューム真の子の女とキャツキャ
ウフフとよろしくやって、子供ネフィリムまでつくつてるしよ。ムカつくわ。ヒューム真の子なんか造る
んじゃなかつた」

「ただ、コイツミナゴロシは見所あるな。それ以外皆殺しな」

ザバーン。すべて洪水で押し流す。（ここは有名）

（挿絵予定）

「洪水」ミケランジェロ

（中略）

「ヒュームバベルの塔の奴ら、俺様に断りもなく文明バベルの塔なんか作りやがって。プチつとな」（ここも

有名)

(挿絵予定)

「ハベルの塔」ブリュエーゲル

(中略)

「んーゴイツも見所あるな。声かけとくか」

「我が力を貸してやろう。オマエの子孫が星の数ほど増えるように、これからオマエは『いと気高き父』と名乗るがよい」

「ただし包茎手術しろ」

「そしたら、子孫を繁栄させたるわ。頑張つて子作りしろよ。産めよ増やせよ地に満ちよオマエらだけな」

(中略)

とある王国に流れ着いた『いと気高き父』とその妻。サツラ妻は非常に美しかった。

「おい、その女は何だ」「妹です」

妹と聞いて、『いと気高き父』の妻に色目を使う王。そこに神が力を貸す。

神「おつとそこまでだ。人妻に手を出すのはご法度だな。払うもん払ってもらうか」

王「い、妹だったのでは……」

疫病でバタバタ死ぬ王国の民。(いや罰は民じゃなく王にしるよ)

王「ひ、ひー勘弁してください。なんでも払いますから」

美人局（つつもたせ）成功（一回目）。

（中略）

また別の王国ゲララルに流れ着いた『いと気高き父』とその妻。

「おい、その女は何だ」「妹です」

妹と聞いて、『いと気高き父』の妻に興味を持つ王。そこに神が力を貸す。

神「おつとそこまでだ。人妻に手を出すのはご法度だな。払うもん払ってもらおうか」

王「まだ色目すら使ってませんが……」

神「今回は、手を出す前に忠告させてもらった」

王「い、妹だったのでは……」

『いと気高き父』「実は妹で妻なんです。兄妹（*3）で結婚したわけでした」「おにいちゃん……」

神「王妃も王女も侍女も召使も、王宮内の女という女は子を産めなくしてある。払うもん払ったら呪いを解除してやろう」

王「ひ、ひー勘弁してください。なんでも払いますから」

美人局成功（二回目）。

（中略）

時がたち、『いと気高き父』とその妻は子を産み、その子も成長した。そして美しい妻

と結婚する。

また別の王国ペリシテ人に流れ着いたその子イサクとその妻リベカ。

「おい、その女は何だ」「妹です」

妹と聞いて、しかし興味を持たない王アヒメレフ。

「他国の王から聞いているぞ。私と王妃の仲は良好でな。貴様の妻には絶対に手を出さない。絶対にだ」

美人局失敗（三回目）。

（中略）

そして『アブハラハムと氣高き父』の子孫ヤコブと、神（*4）との邂逅。暗闇での格闘。

「え、オマエ、オレ様見て死んでないの？ よつしやマブダチな。『神イスラエルに勝つ者』と名乗っているぞ」

（え、普通は死ぬのかよ。『子孫を繁栄させる』つといて、死んでたらどうするつもりだったんだ？）

（中略）

第二部（出エジプト記）

その後、王国で一時は栄華を味わう『神に勝つ者』とその子孫たち（以下『神に勝つ者の民』）。

しかし時がたち、国王が変わり、他民族である『神に勝つ者』の民を奴隷として扱うようになる。

「あーそういえば、子孫繁栄させたるて『いと気高き父』と『神に勝つ者』に約束してたの忘れてたわ。（2：23）」

（神は見守ってるんじやなかったかよ！ 奴隷になつてからもう王が何代かわわつてるよ！）

王宮で育つた男、マシヤ。しかし彼は赤子の時に王女に拾い上げられた奴隷の子であり、マシヤと名付けられた。

（挿絵予定）

ニコラ・プッサン

彼は長じたのちに出生の秘密を知り、奴隷を助けるために、思わず王国兵士を殺してしまう。逃亡生活を続けるマシヤ。

かくして神は、『神に勝つ者』の民の中から、たまたま神のいた場所に通りがかった運の悪いおっさん、マシヤに目を付ける。

「おい。俺様はオマエの先祖に約束した神だ。約束の地に連れてってやるから、『神に勝つ者』の子孫連れてこい。オマエがリーダーな」

「え、えつと、どちらさんで？」

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神

「先祖 先に約束した神だつてるだろ、先祖の名前も知らねーのかよ。そうだな、俺様なんでもできるから『何にでもなれる者』とでも呼んでくれ」

「い、いや、私、く、口下手なもので、とても民を導くなんて……」

「そんなん口が上手い奴にやらせとけばいいーだろ。魔法が使えるようにしてやって、奇跡の杖やるから、コレで奇跡を行って連れてこい。とにかくオマエがヤレ」

「でも……」

「オマエいい加減にしろよ。ブチコロすぞ」

(挿絵予定)

「Burning bush」セバスチャン・ブルドン

(中略)

そして始まるマシヤ^{モーセ} VS 王国^{エジプト}宮廷魔術師との魔法大戦。河は血になり、
モンスター^{カエルやイナゴ}が召喚され、疫病が流行り、空は暗闇となった。さらに、王子、王国全土の
民の長子と家畜の長子^{エジプト}が変死する。

神の力により、王国の王は既に神に操られていた。

（挿絵予定）

「エジプト第七の災い」 ジョン・マーティン

（挿絵予定）

「エジプト最後の災い」 エラストウス・ソールズベリー・フィールド

変死

「もういいから出て行ってくれ」

かくしてマシヤ^{モーセ}は『神に勝つ者』^{イスラエル}の民を連れ、約束の地^{カナ}へと旅立つ。王国^{エジプト}の民衆から

略奪してから出ていくのは忘れない。

この時、『神に勝つ者』^{イスラエル}の民の家にしるしをつけ、その家は通り過ぎ^過ぎ、それ以外の家からすべて略奪したので、彼らは毎年コレ^過を記念した祭りをする。イエスが最後の晩餐
やっつてるアレだ。

（挿絵予定）

「最後の晩餐」 レオナルド・ダ・ヴィンチ

過越祭り（略奪記念祭）の風景

（王国《エジプト》の民衆側から見るとヒドイ。「お頭、^{カシラ}あの時は略奪でぼろ儲けでしたね」という山賊パーティみたいだ）

しかし海辺に近づいた時に王国の追手が！ 王は既に操られてるので、完全にヤラセである。マシヤが脱出したトコでワザと追いかけさせ、さらにギリギリの^{海を二つに割る}トコで助ける。

「見た？ 見た？ 今のカツコよかつたろ？ こんな俺様にしつかできねーだろ。コレで俺様の凄さが王国の奴らに分かつたろ？」

（挿絵予定）

「The Crossing of the Red Sea」ニコラ・プッサン

（挿絵予定）

「Pharaoh's army engulfed by the Red Sea」Frederick Arthur Bridgman

（神の凄さを見せつけるためだけのために、大地を荒らされ、王子と民の子と家畜の子が死んだ、王と王国は完全にとぼちりである）

（中略）

約束の地^{カナナン}の近く。もちろん一先住民が住んでいる《カナナン人、ヘテ人、アモリ人、ペ

リジ人、ヒビ人、エブス人》。

神「オマエラあそこ行つて全員虐殺してこい」

（コレはひどい。ラノベ脳で読んできると、カナンの先住民が、盗賊に襲われるエルフ村にしか見えない）

（中略）

「あ？、ダレが偵察しろなんて言った？ 俺様がいつそんなこと言った？」

「偵察に賛成した奴はダレだ？ オマエか？ オマエもか？」

「俺様が力を貸してやるつってんのに、勝手に偵察へ行つたつてことは、俺様の力を信じてねえつてことだな。ああ？」

「連帯責任で、全員40年の放浪だ。約束の地^{カナナ}へ行けるのは、偵察に反対したやつと子孫だけ。偵察に賛成した奴は野垂れ死ね」

（これもひどい。偵察は戦争の基本では？ という人間の理屈は神には通じない）
 モーセ マシヤ「え？ 俺も？ 40年？ 放浪？」

（モーセもとぼつちり。この辺から、モーセが無茶ブリ上司の下の中間管理職に見える）
 経験者は胃がキリキリしてくる）

放浪中「こんなハズじゃなかった」^{エジプト}「王国の奴隷の方がマシだった」「オマエが連れ出したせいだぞ」

モ一セ
マシヤにぶ一垂れる『神に勝つ者』の民。反対者

モ一セ
マシヤ「ちよ、おま、オレがどんだけ苦労してると。神に聞こえたらど一すんだよ」

神「聞こえてんぞ」「言つた奴は死ね」どんだ減る『神に勝つ者』の民。

(中略)

「もう放浪やめて、このへんで畑でも作つて住めば都だよ」「肥沃そうだな」「んだんだ」

モ一セ
マシヤ「ちよ、おま、シーツ」

神「聞こえてんぞ」「言つた奴は死ね」またどんだ減る『神に勝つ者』の民。

(中略)

「あ一腹減つた」「ホント腹減つた」「クソ不味い神の食物しかね一し」またぶ一垂れる

『神に勝つ者』の民。

神「ほ一、腹が減つたと」「俺様が用意したメシが不味いと」「すまんな気づかなくて」

「よつしや、オレ様がウマイモンを腹いっぱい食わせてやろう」

「やつた一さすが神」「まさに神」「ステキ！抱いて！」「肉だ一」手のひら返す

『神に勝つ者』の民。

「もうおなかいっぱいだ」「こんなに食べたのは久しぶりだ」「肉だ一」

「んー、聞こえんなー。腹が減ってたんだろ。もつと食べろよ。まだまだあるぞ。ホラ、俺様が食わせてやろう」

「ちよ、ン、ムググ……」

「パーン」 さらにどンドン減る

『^{イスラエル}神に勝つ者』の民。

(中略)

マシヤ^{モーセ}「もうこれ以上、言うこと聞かない民を率いていくのは(心の声:もつとワガママな神の言うこと聞くのは)、私には無理です。いつそ殺してください」(血涙)

神「んー聞こえんなー」

神と『^{無茶ブリ上司}神に勝つ者』の民に挟まれ、マシヤ^{モーセ}の中間管理職な日々は続く。